

『キリスト教史学』第六七集抜刷
二〇一三年七月二〇日 発行
キリスト教史学会

〔論文〕

南米に移住した長崎のキリシタン家族

——ボリビア多民族国サンファン日本人移住地の事例——

小川 俊輔

南米に移住した長崎のキリシタン家族 ——ボリビア多民族国サンファン日本人移住地の事例——

小川 俊輔

一 はじめに

一―一 目的

日本は戦前・戦後を通じて、海外に多くの移住者を送り出してきた。移住先の国としては、ハワイ、ブラジル、カナダ、アメリカなどがよく知られている。だが、戦後、南米の内陸国であるボリビア多民族国（以下「ボリビア」と略記）への集団移住が行われたことは、あまり知られていないようである。現在、ボリビアにはサンファン (San Juan) 移住地とオキナワ (Okinawa) 移住地が存在する。オキナワは基本的に沖縄県出身者のみで構成されている。一方、サンファンへは沖縄を除く日本各地から移住が行われ、約半数が長崎県出身者である。二〇一〇年（平成二二年）一〇月における移住者の出身地の割合を県別に示すと、高い順に長崎が四六・四％、次いで福岡の七・四％、北海道の五・一％となっている。¹⁾

そして、長崎からサンファンに移住した人々の中に、多数のキリシタン家族（カトリック信者の家族）が含まれていた。本稿では、この長崎出身のキリシタン家族に焦点を当て、彼らの信仰生活史の記述を目指す。

一―二 方法

本稿の著者は、二〇二二年（平成二四年）二月一四日から同月二九日にかけてサンファン移住地およびサンタクルス (Santa Cruz) 市で実地面接調査を行った。本稿はこの調査によって得られた資料を中心に議論を進める。

一―三 先行研究、本稿の位置

サンファン日本人移住地のキリスト教史に関するまとまった先行研究は少ない。これまで、移住者の手により四冊の『年史』（『サンファン十五年史』、『サン・ファン移住地三〇年史』、『サンファン移住地入植四〇周年記念誌緑の輝く大地 一九八六年―一九九五年サンファン日本人移住地十年間の歩み』、『サンファン日本人移住地入植五〇年史 拓け行く友好の懸け橋汗と涙、喜びと希望の記録』。以下では、それぞれ『十五年史』、『三〇年史』、『四〇年史』、『五〇年史』と記す）が編まれたが、それらはいずれも教会堂の建設年や歴代神父と修道女の名前等を挙げてはいるものの、当該移住地のキリスト教史にかなする詳しい記述はみられない。

研究者の手によるものとしては、Thompson, Stephen Ide の論文 *Religious Conversion and Religious Zeal in an Overseas Enclave: The Case of the Japanese in Bolivia* (一九六八年（昭和四三年）刊) と国本伊代の著書『ボリビアの「日本人村」』（一九八九年（平成元年）刊、中央大学出版部）の二つがある。

Ide の論文は、一九六四年（昭和三九年）一二月から一九六六年（昭和四一年）二月にかけて日本とボリビアで行われた実地調査に基づいて書かれている。移住地に住むカトリック信者について、「日本においてカトリック信徒であった」グループと「サンファンでカトリックに改宗した」グループに分け、後者に比べて前者の方が熱心かつ明白な信仰を持つことを指摘し、その理由として、前者のほとんどが長崎県の出身であり、殉教者の子孫であることを挙げ、後者については、ボリビアの国教がカトリックであることによる消極的改宗であったからだ

説明している。

国本の書は、一九八二年（昭和五七年）年から一九八八年（昭和六三年）にかけて断続的に行われた実地調査に基づいて書かれている。この書の記述内容は、移住地の地理、経済、風土、教育、言語など多岐に渡っており、宗教についても言及がある。但し、[6]が考察の対象とした「日本で洗礼を受けた長崎出身のカトリック信徒」に
かんする詳しい記述・考察は見当たらない。

本稿は、[6]と国本による二つの先行研究を踏まえ、特に長崎出身のキリシタン家族の移住の目的、動機、移住後の信仰生活に焦点をあてて考察を行うものである。

一四 サンファン日本人移住地のカトリック教会略年表

「一九五五年（昭和三〇年）」第一次移住者が入植する

「一九五八年（昭和三三年）」カトリックの教会堂が建設される（モタク葺き）

「一九六一年（昭和三六年）」煉瓦建て瓦葺きの教会堂が建設され、サンファン・カトリック教会の初代司祭としてマヌエル・フェルナンデス（Manuel Fernandez）神父（イエズス会）が着任

「一九六八年（昭和四三年）」日本人修道女の常駐が開始

「一九九八年（平成一〇年）」現在使われている教会堂が完成

二 本論

二一 九州のキリシタン移住史——繰り返される移住——

（一）江戸時代末期の移住

長崎では、江戸時代に大村藩領の外海地方から五島藩領へのキリシタンの移住が行われた。一七九七年（寛政九年）、外海の黒崎、三重の両村から一〇八人が五島に渡り、その後、三〇〇人が移住している。この移住が行われたのは、五島には未開拓地が多い一方で人口が少なかったこと、逆に大村藩は財政上の問題から産児制限を行うほど耕作面積に対して人口過剰であったこと、キリシタンには産児制限（嬰兒殺し）への強い抵抗があったこと、五島藩のキリシタン弾圧は大村藩のそれに比べ比較的緩いと考えられていたことなどにその理由を求めることができる。二〇一二年（平成二四年）九月現在、五島列島には五〇以上のカトリックの教会堂が存在する。これらの教会は、江戸時代の移住者の子孫によって明治以降に建てられたものである〔1〕。

現在、佐世保市に属する黒島にも、五島への移住と同時期に大村や外海の黒崎からキリシタンの移住が行われた。これも、未開拓地の開墾と自由なカトリック信仰を求めて行われたものである。一八六五年（慶応元年）には、約六〇〇人のキリシタンがこの島に暮らしていたという〔2〕。

佐賀県の松島は、二〇一三年（平成二五年）三月現在、全島民がカトリック信徒である。この島は江戸時代末期まで無人島であったが、黒島キリシタンの移住により集落が形成された〔3〕。

佐賀県の馬渡島への移住は、江戸時代末期の一八六〇年（安政七年）頃に行われた。これも、外海地方のキリシタンが移住したものである〔4〕。

（二）明治時代以降の国内移住

明治時代以降の国内移住については、移住者の立場（目的）から二種に分けることができる。一つは、江戸時代と同様の開拓移民としての移住である。もう一つは労働者（特に炭鉱労働者）としての移住である。

まず、明治初年頃、五島の久賀島キリシタンが迫害を逃れるために佐世保の黒島に移住している〔5〕。

平戸市田平地区への移住は、二人のパリ外国宣教会の神父の手によって進められた。まず、ラゲ (Emile Rague) 神父が一八八六年 (明治一九年) の春、佐世保の黒島から三家族を移住させた。ド・ロ (Marc Marie de Roiz) 神父は、一八八七年 (明治二〇年) 六月に外海の出津から四家族二五人、翌一八八八年 (明治二一年) に八家族三一一人、一八九三年 (明治二六年) に三家族一四人を移住させた。これが田平の信徒集落の始まりとされる⁽⁷⁾。

大正末期から昭和初期にかけて行われた福岡県の豊津、新田原・築城地区への移住の経緯については、伊東誠二監『萌芽 福岡教区五〇年の歩み』(カトリック福岡教区、一九七八、三二―三三頁) および丸山孝一『カトリック土着 キリシタンの末裔たち』(日本放送出版協会、一九八〇、二一五―二一六頁) に詳しい。これらによれば、カトリック教会の神父たちが、貧農化し困窮する五島の信者たちに土地を売って当地に移住することを強く促したという。その結果、冷水、頭ヶ島、仲知、江袋、熊高等五島各地から、また、八幡製鉄所に働きに出た人々の一部が、開拓移民としてこの地に移住していった。当地の一九三二年 (昭和六年) 当時の信者数は三八二名であった⁽⁸⁾。

福岡市の沖合に浮かぶ能古島のカトリック集落も明治時代以降の移住によって形成されたものである。昭和初め頃の平戸市田平地区からの移住者を祖とし、その後、長崎、福岡市内、馬渡島、ブラジル移民の帰国者などが移住してきた。二〇〇二年 (平成一四年) 二月三十一日時点における信徒数は九一名であった⁽⁹⁾。

以上は開拓移民としての移住である。これとは別に労働者 (特に炭鉱労働者) としての移住が行われた。以下、伊東誠二監『萌芽 福岡教区五〇年の歩み』(前掲) における長崎のカトリック信徒の福岡教区への移住に関する記述 (二五―三四頁) を整理して示す。なお、傍線は本稿の筆者が付したものである。以下同様。

○北九州市小倉の福音宣教開始は一八八九年 (明治二二年) である。当時この町には長崎県出身の旧信者約四〇人が近くの炭鉱労働者となって住んでいた。小倉はもともと何の変哲もない田舎町にすぎなかったが、一八九五年 (明治二八年)、陸軍第二師団がおかれたことで急速に発展した。工業、商業の中心となるにつれて、長崎からの信者の移住も増えた。

○門司には一八九七年 (明治三〇年) 頃から、船の石炭荷役に働く長崎出身の信者約四〇人がいた。

○戸畑、若松両市の信者たちのため、戸畑に巡回教会が出来たのもこのころである。大正末期まで現在の北九州市には、小倉にしか教会はなく、広い地域に散在する信者 (その多くは長崎出身の旧信者) にとって小倉まで日曜日のミサに出かけるのは大きな犠牲であった。

○一九三四年 (昭和九年) 九月に、小倉から独立して戸畑教会を設置。信徒数一八一人であった。

○飯塚教会は、一九三四年 (昭和九年) 八幡教会の建設を終えたドレル (Joseph Doller) 神父が、筑豊炭田の中心都市として人口が増える一方であった飯塚市に宣教の手を伸ばして建てたものである。飯塚は当時人口約一〇万、長崎地方から炭鉱に働きに来た信者も多く、一年後には一八〇人を数えた。

また、一九八〇年 (昭和五五年) 当時の名古屋教区における移住信徒の約八〇%が長崎出身者であったという⁽⁹⁾。これらはすべて労働者として働くために行われた移住である⁽¹⁰⁾。

(三) 明治時代以降の海外移住

明治時代以降のカトリック信徒の海外移住については、二つの事例がよく知られている。すなわち、福岡県大刀洗今村信徒および佐世保市黒島信徒の南米移住である。いずれも明治時代に移住が始まり、太平洋戦争終結後にも呼び寄せなどにより継続された⁽¹⁰⁾。

本稿が主題として取り扱うボリビアへの移住は、前記のとおり一九五五年（昭和三〇年）頃より始まっている^⑪。

（四）九州のキリシタン移住史のまとめ

（一）から（三）の九州のキリシタン移住史を整理すると、表1のようになる。

	移住時期	移住元	移住先	移住者の立場
①	1797年～	外海	五島各地	農地開拓
②	1797年～	外海	黒島	
③	江戸末期	黒島	松島	
④	江戸末期	外海	馬渡島	
⑤	明治初年頃	久賀島	黒島	
⑥	明治中期	黒島、外海	田平	
⑦	大正末期～	五島各地	豊津、新田原	
⑧	昭和初期～	田平等	能古島	
⑨	明治～	五島各地	炭鉱町(福岡)など	
⑩	明治～	長崎、福岡	南米各地	南米開拓移民
⑪	1955年～	長崎	ボリビア	

表1：九州のキリシタン移住史

従来、キリシタン・カトリック信者の移住については、各個教会史（教区史）においてそれぞれ記録されてきているが、それを横断的に整理・記述した資料は管見の及ぶ限り見当たらないようである。（一）から（三）の本稿の記述も、おそらく、九州におけるキリシタン移住史の一部を切り取って整理したに過ぎないだろう。しかし、移住者を先祖に持つ人々が、自らもまた新天地を求めて移住してきた歴史は看取されよう。たとえば、幾世代にもわたる外海→黒島→田平→能古島、あるいは、外海→五島→黒島→南米などの移住遍歴が見えてくる。本稿が主題として取り上げるボリビアへの移住も、以上のような江戸時代以来の移住史を背景に持つ出来事として捉える必要があるのではないかと思われる。

二―一 移住の経緯と目的

（一）経済的理由による移住

長崎のキリシタン・カトリック信徒は、仏教徒に比して相対的に瘦せた土地での信仰生活を余儀なくされてきた。禁教により潜伏キリシタンが離島・沿岸地域で潜伏形態の信仰を余儀なくされたことはよく知られているが、外海から五島に移住した潜伏キリシタンたちに藩から与えられたのは、離島である五島の中でも、いっそう土地の悪い土地であった。

また彼らは信仰上の理由から産児制限（嬰兒殺し）に消極的だった。たとえば一九六〇年（昭和三五年）頃の佐世保の黒島の一世帯あたりの構成人数は、カトリック家族が六・一人なのに対し、仏教家族が四・八人である。同時期、長崎県全体では、都市部で四・八人、郡部で五・二人であり、黒島カトリック家族の多産を知ることができる^⑫。

以上のような歴史的、地理的、宗教的理由から、キリシタン・カトリック信徒は経済的困窮に苦しめられてきた。それが彼らをして新天地を求めての移住を繰り返せしめてきた最大の理由であろう。

（二）信仰上の理由による移住——自由なカトリック信仰を求めて——

（一）で述べたように、人々に移住を決意させる理由としてしばしば経済的困窮・生活苦が挙げられ、そのために「移民」という言葉にはネガティブな印象がつきまとうている。それで最近では「移民」という言葉を避け、「移住者」という言葉が使われるようになってきている。しかし、キリシタン・カトリック信徒の移住に、信仰上の理由というポジティブな側面があったことはほとんど知られていないのではないだろうか。

戦前・戦後に南米へ移住した人々は、南米がカトリック国であることを認識しており、それが移住を決意させた理由の一つとなっている。サンファン移住地での聞き取り調査では、次のような談話が得られた。

○父からカトリックが自由にできるだろうという理由もあったと聞いた（一九三六年生・男・一九五八年入植）。

○移住の理由としてポリビアがカトリックの国というのもあった（一九三六年生・男・一九五八年入植）。

○カトリックのパードレ（神父―筆者注）も移住を応援していた。当時、（長崎県生月島の）老部カトリック教会の司祭だった山田福太郎神父様の後押しがあった。昭和三〇年代初め、戦後で地方には仕事がなく、都会に出て仕事を探しに行くという時代だった。ポリビアはカトリック国である。家族みんなで日曜日に教会に行けるということが一つの決め手となった。子どもがばらばらになることも気になった。ポリビアなら一緒に暮らせる。子も親も同じ宗教というのは大きな力だ（一九三一年生・男・一九五八年入植）。

これらの談話から、自由なカトリック信仰を求めて移住が決意されたことが分かる。ところで、お一人が、南米移住に際してカトリック教会神父の勧めがあったことを述べている。二―一において記したとおり、黒島・外海から田平への移住、五島各地から豊津・新田原への移住にもカトリック教会神父の勧めと斡旋があった。また、福岡の今村教会主任司祭であった本田保神父も、今村カトリック信徒の南米移住に際し、大きな役割を果たしている。このように、カトリック教会は信徒の移住に対して積極的な役割を果たしてきた。第二次世界大戦後は、日本のみならず世界のカトリック教会が、難民救済に関連して移民問題に力を入れていた。

(三) 信仰上の理由による移住——「潜伏キリシタン指導者の家系」という自覚——

五島の久賀島細流石にルーツを持つ畑中家のサンファン移住も信仰上の理由から行われたものである。しかし、それは「自由なカトリック信仰を求めて」という理由とは異なるものであった。江戸時代末期、パリ外国宣教会のプチジャン（Bernard Thadée Petitjean）司教によって大浦天主堂が建堂されたことを耳にした久賀島の潜伏キリシタンは、当地の指導者をプチジャンの元に派遣する。その中に、畑中藤七、栄八、九助が含まれていた。彼らこそ、後にサンファンに渡った畑中家の直接の先祖である。

現在、ポリビア東部最大の街サンタクルス市在住の畑中美保子氏から、畑中家の移住の経緯および畑中家が移住地で果たした役割について次のとおり教示を受けた。

○移住地から「誰か、神父でなくてもいいから（カトリックの霊的指導者が）来てほしい」という希望があった。それを聞いた父が移住を決意した。

○私が「日本に帰りたい」と父親に言っていたのを聞いた祖父が、畑中家の歴史を話し、畑中家（お父様）のサンファンでの役割を説明した。それで初めて移住の理由を理解した。

○父は旧信者の家を訪問していた。また、大きな祝日にはお祈りを主導した。イエズス会の神父の手配をした。聖歌を教えたりした。ミサではオルガンを弾いた。移住の理由は、開拓ではなく、宗教上の理由だった。

○父は、カトリック国であるポリビアならば子どもたちも自由にカトリック信仰ができるだろう、広い土地でのびのびと育つだろう、いやな思いをすることもないだろうと考えたと聞いた。

畑中家がサンファンへ移住したのは一九六一年（昭和三十六年）のことである。この年、当該移住地の日本人移住者の司牧を担当するイエズス会神父が日本から派遣されている（この神父の活動については二―四節で詳述）。

二一三 サンファン移住地における長崎のキリシタン家族と当地でのカトリック改宗者

(一) 長崎のキリシタン家族とサンファンでのカトリック改宗者の比較

「B」は、当該移住地における長崎のキリシタン家族と当地でのカトリック改宗者のカトリック信仰に対する熱心さの強弱について考察を行い、結論として、前者の方が、後者に比べて三位一体などの教義を深く理解し、ミサにもよく参加し、家の中に聖人の絵画やその他の信仰用具が目につくかたちで置かれていると述べている。その理由を、前者が「殉教者の子孫である」という意識を持ち、そのことに誇りを持っているからだという。

本稿の著者の移住地訪問は「B」の調査から約五〇年後に行われたものだが、相変わらず長崎のキリシタン家族は敬虔な信仰生活を送っていた。それはやはり「B」の指摘のとおり、自分たちが殉教者の子孫であることをはっきりと自覚しているからであろう。

○曾祖母がカトリックになった。その前は納戸神（潜伏キリシタン―筆者注）だった。ラテン語で言い伝えのオラシオンをやっていた（一九四八年生・男・一九五八年入植）。

○先祖が血で残した宗教ですから守っていきます。大刀洗や新田原にも移住の歴史がある。知りたいと思う（一九三九年生・男・一九五八年入植）。

○江戸時代は納戸神だったが、明治になってカトリックになった。旧信者は現在四〇戸あり、五島・生月の出身者が多い。かつては、毎日「公教要理」をやっていた。暗記していた。先祖代々の信仰だからやめるつもりはない（一九三六年生・男・一九五八年入植）。

○祖父は慶応三年三月生まれ。五島から平戸に移住。祖父の頃からカトリック。半農半漁で苦しい生活だった。日本ではカトリック信者は条件の悪いところしか住めなかった。ボリビアではこのサンファン教会だけ信

者のお金で維持されている。それを私は誇りに思っている。子どもの頃は、学校の勉強と教会の勉強の二つがあった。熱心にやった。日本では「公教要理」などを特別に教える人がいて、「教え方」と言った。パードレ、シスターの代わりに教えた。試験があった（一九三三年生・男・一九六〇年入植）。

○出身地の生月にはアトメントのフランシスコ会から神父様がみえて、カクレの人々に一生懸命働きかけをしていたが、頑なに教会には来なかった。改宗を求めても拒んだ。生月には「千人松」と呼ばれる土地があり、そこでは千人以上が殉教して、海まで血が流れた。ザビエル以来、生月島の島民の八〇%がカトリックになった。松明をつけて練り歩いてお祈りをした（一九五〇年生・女・一九六二年入植）。

○母方の祖父が熱心なフルギリシタン（カクレキリシタン―筆者注）だった。おじさま役をしていた。カトリック教会のパードレの立場で、風呂も一番に入っていた。母方は今でもフルギリシタンを続けている。行事をやったり、お祈りをしたり。父方は明治の頃にカトリックになった。明治にカトリックになった人は少なく、二〇家族くらいだった。元々生月島は七〇%がキリシタンだった。その後、カクレになった。こちらに来て結婚した相手が旧信者（出津）の家系だった。そのことを両親がたいへん喜んだ。小さい頃、「公教要理」を夏休みに暗記していた。試験があった。今になって読み返している。教え方様から教えられて信じるのだが、今思い返せば学理的にはおかしなところもあった。死ぬまでに「聖書」を全部読んでしまおうと、少しずつ読んでいる（一九三二年生・男・一九五八年入植）。

○ド・口神父に指導された出津の出身である。神父の祖先はナポレオンの大切な配下だった。厳しい方だったが、良い方だった。私は迫害されたキリシタンの子孫である。おぼは拷問を受け、火あぶりにされた。浦上四番崩れで最後の最後まで苦勞した家系である（一九三三年生・女・一九五五年入植）。

以上の談話から、長崎出身のカトリック信者が先祖の歴史についてよく理解しており、そのことが、カトリックへの熱心な帰依に繋がっていることを読み取ることができる。サンファンで育った長崎のキリシタン家族の中から、一人の神父と五人以上の修道女が出ていることも、彼らの篤い信仰心を反映しているように。

前節で紹介した畑中家は、二人のシスター（現在は健康上の理由などにより修道院を離れている）と一人のブラザーを輩出している。前出の畑中美保子氏の弟である畑中光明氏は Marist Brothers のブラザーで、同会の公式ホームページにある氏の自己紹介ページには、次の記述がある。¹⁴⁾

○ At that time my parents were living in city. They attended Mass even though they did not understand any Spanish. My ancestors had a close connection with the first evangelization of Japan. From that I received a solid tradition of the Christian experience. When my family decided to emigrate from Japan to Bolivia, they did so with a missionary spirit: to maintain the faith through the evangelization and animation of the Japanese Colony established in Bolivia. That has also given me much happiness and I see now that my whole family feels the joy of my being a Marist Brother.

畑中家の先祖は、ザビエル以来のカトリック改宗者であったこと、光明氏はその家族の歴史・伝統を受け継いでいること、また、畑中家がボリビアへの移住を決心したとき、そこには福音宣教の精神が伴っていたことなどが明記されている。

(二)「旧信者」「新信者」「未信者」という言葉の意味するもの

(ア)「旧信者」という言葉の意味と出自

サンファン移住地には、「旧信者」「新信者」「未信者」という三つの言葉がある。当地では、「旧信者」は「日本においてカトリックの洗礼を受けていた人」、「新信者」は「サンファンにおいてカトリックの洗礼を受けた人」、「未信者」は「カトリックの洗礼を受けていない人」という意味で使用されている。

「旧信者」という言葉の出自は古く、一八六七年（慶応三年）のバリ外国宣教会の年次報告にみられる「旧信徒を発見」という言葉にさかのぼるものと考えられる。そして、次の例が示すとおり、この言葉は、主に司牧側の人々（教会、神父、修道女）によって主に使われてきたものであるとみられる。二一（一）の引用文（引用元の文献はカトリック福岡教区によって編纂・出版されたもの）の傍線部のとおり「長崎（県）出身の旧信者」という表現が二度使われている。また、福岡県の今村教会の『信仰の道程 今村信徒発見一二五周年記念誌』には当地で司牧に当たった神父・修道女の文章が載せられており、そこに「旧信者」という言葉が使われている。

○私は、本郷の真に旧信者らしい雰囲気が好きでした。本郷は散歩するには天国です。どこにでも信者の家があり、散歩に行くと、どこでも信者と話しができました（本郷教会第四代主任司祭ケビン・オマホニ神父¹⁵⁾）。

○私が本郷教会でカテキスタ（要理説明者）としてお手伝い致しましたのは一年余りの短期間でしたが、当地は旧信者の伝統的信仰を受けついで根強い信仰保持者が多く、本当に嬉しく思った記憶があります。然し伝統的信仰は聊もすれば形式的受け継ぎに終始して信仰のマンネリ化に陥り易く、イエズス様の示された理知的信仰への道を見失いがちです（本郷教会川口敏子シスター¹⁶⁾）。

これらの使用例から、国内で使われていた「旧信者」という言葉は、「ザビエル時代のキリシタンや禁教時代の潜伏キリシタン」のことを指していたのではないかと考えられる。一方で、先に見た二一（二）の引用文で

は「潜伏キリシタンの子孫にあたるカトリック信者」を意味しているようであり、「サンファン移住地での使用法」「日本においてカトリックの洗礼を受けていた人」ともずれがある。これらの言葉の意味・用法の史的変遷過程については、今後の調査によって明らかにしたい。

(イ)「新信者」という言葉の存在が意味するもの
 とところで、「未信者」は国内でもカトリック信者の口から耳にする言葉であるが、「新信者」は一般になじみの

仏教 (様々な宗派を含む)	84
神道	6
カトリック	
日本で信徒だったもの	(34)* 「旧信者」
ボリビアで改宗したもの	(50)* 「新信者」
合計	84
創価学会	
日本で信徒だったもの	(35)
ボリビアで改宗したもの	(11)
合計	46
その他の「新興宗教」	6
特定の宗教への信仰なし	30
データ結果なし	6
総計	262

表2：1965年における262家族家長の信仰

Ide (1968) の表を描き改めたもの

薄い言葉ではないだろうか。しかし、サンファン移住地ではしばしば耳にした言葉であった。この言葉の繁用・頻用の背景はなんだろうか。言語学の定理に従えば、ある社会で新しい語が創られ、使われるのには、その社会にその語を必要とする社会的な背景があるはずである。

そもそも、サンファンに「新信者」と呼ばれる人はどの程度の割合で存在したのか。そのことについては、前掲のIdeの論文に表2のデータが示されている。このデータは、一九六五年(昭和四〇年)における全二六二家族の家長の帰依する宗教を一覧にしたものである。この年は、サンファン移住地に日本人の司牧を担当する神父が日本から派遣されて四

年しか経過していないのであるが、すでに五〇家族の家長がカトリックに改宗し、「新信者」となっている。

「新信者」のカトリックに対する帰依は「旧信者」のそれに比べ、相対的に弱いものである。極端な例ではあるが、Ideの論文には、自らの洗礼名を覚えていない「新信者」の存在が報告されている。「旧信者」の場合には考えられないことでないか。また、本稿の著者による調査でも、

○古い(仏教的な)信仰態度に対して「あなたは新信者やからな」などと言っていた。(旧信者)

○今でも「新信者」は「旧信者」に比べてあまり教会に行かない。(新信者)

○改宗者が多い理由はボリビアがカトリック国であり、ボリビア社会で生きていくには仏教徒や神道氏子であるよりもカトリック信者である方が都合が良いと考えられたこと、移住地内で評判の良かったカトリックの運営する学校に行かせるためには、カトリック信者である方が有利であると考えられたことなど、多くの理由がある。(旧信者)

などの談話が得られた。他方、一人の「新信者」の方からは次のような発言があった。

○差別されているようで、「新信者」「旧信者」という言葉を好ましく思っていないかった。(新信者)

以上のことから、(a)「禁教時代の潜伏キリシタンの子孫である」という「旧信者」の意識、(b)それを背景とした熱心なカトリック信徒の存在、(c)急速に数が増えたサンファン移住地でのカトリック改宗者の存在、(d)改宗者が「旧信者」ほどはカトリックに対して熱心ではなかったことなどが、「新信者」という言葉の繁

用・類用の背景にあると考えられる。¹⁸⁾

二一四 神父と修道女の活動と役割

(一)「太郎神父」

サンファン移住地では、神父と修道女が宗教面以外にも様々な役割を果たしてきた。四つの『年史』と国本の著述¹⁹⁾に基づいて整理する。

原生熱帯雨林を手斧で伐採して農地を開拓していくという過酷な労働が強いられていた移住初期、カトリック信者は日本から持参した祈祷文などに基づいて、各家庭・各地区で集まって祈りを捧げていた。そのような状況下にあつて、日本から派遣された初代カトリック・サンファン教会司祭のイエズス会士マヌエル・フェルナンデス神父は、一三年の日本滞在経験から日本語を話すことができ、「太郎神父」と呼ばれ、移住者から慕われた。初代のサンファン教会は「太郎神父」と「旧信者」たちの協力によって建設された。神父は教会をカトリック信者以外にも開かれたものにしたと考え、教会の入り口に鳥居を設置した。また彼は、ボリビア社会と日本人移住地の間に発生した諸問題の解決の為にしばしば仲介役を務めてもいる。宗教的には中立の立場によって書かれた『年史』も、同神父について、

○教会建設には、フェルナンデス神父及び移住者中の信者は大変努力され、立派な教会を建築した。又フェルナンデス神父は移住地の教育面にも努力されその功績は大きい。²⁰⁾

○日本滞在の経験もあり日本語も堪能で、移住者に親しまれ、サグラードコラソン時代の校長も兼任するなど移住地の教育に力を尽くされた。²¹⁾

○初代のフェルナンデス神父は移住者には非常に親密でタロウ神父と親しまれてサグラド・コラソン校時代には学校の校長も兼任して、日本滞在経験もあり日本語での会話も堪能であった。²²⁾

と、いずれもその人柄・功績を高く評価している。当時、財団法人日本海外協会連合会のボリビア支部長として移住地の発展に尽くした若槻泰雄は、同神父について、次のように記している。

○サンファン祭りも近づいたころ、サンタクルスにフェルナンデス神父が現われた。(中略)彼はボリビアに在住する日本人移住者に対する伝導に従事するために、ローマ法王庁から派遣され、最近ボリビアに到着したばかりである。海協連(財団法人日本海外協会連合会の略|引用者注)の事務所を訪れた彼は、教会の建設から幼稚園の設立、女子のための職業学校の経営などに及ぶ抱負を、眼を輝かせながら語った。縁もゆかりもない異国人のために、はるばるとこの密林の中にまでやってきて、身を挺して伝導に当らうというフェルナンデス神父の熱心な話には、異教徒のわれわれも胸をうたれざるを得なかった。²³⁾

その後、第八代までがイエズス会士、第九代以降はサレジオ会士がサンファン教会の主任司祭を務めてきた。やがてサンファン移住地には多くのボリビア人が居住し始め、ミサにも出席するようになった。こうして、日本人のための教会としてスタートしたサンファン教会は、「ボリビア国内の一教会」としての性格を強めていき、日本語を話さない司祭が司牧を担当するようになっていった。

(二) 日本人修道女の貢献

日本人修道女のサンファン常駐は一九六八年(昭和四三年)に始まる。まず、メルセス会、次いで礼拝会、カリス会と引き継がれ、現在はサレジアン・シスターズの修道女が活動している。各家庭を訪問してロザリオとともに唱えるなど、日本人修道女が信者の信仰生活に果たしてきた役割は大きい。特に、日本語を話せない神父が赴任するようになって以降は、いつそう、日本人修道女の存在が日本人信者の支えとなっていたようである。

また、彼女たちが果たした役割は、カトリックの司牧面のみにとどまらなかった。

○イエズス会や、サレジオ会の神父と共に、移住地の教育と、地域社会の発展に力を尽くしたのが日本から遙々と渡って来て、忍耐強く活動を続けられた修道女たちであった。(中略)カトリック神父の存在はもちろんであるが、これらシスターの存在なしでの移住地の教育は考えられなくなっている。

○サンファン学園の宗教、英語、習字、道徳などの科目を指導していた(中略)信者以外にもカトリック精神に基づいた奉仕活動が行われている。

移住地には日本人子弟のために建てられた学校(サンファン学園。現在はボリビア人も通っている)があり、日本人修道女はこの学校で授業を担当してきた。その他、教室を開いて生け花や箱庭、習字などを移住者(主に女性)に教えている。

二一五 サンファン移住地のカクレキリシタン

サンファン移住地に関する先行研究において、当地にカクレキリシタンが存在したことを報告するものはない。

しかし、本稿の著者の聞き取り調査の結果、かなり多くのカクレキリシタン家族が当地に移住していたことが明らかになった。証言を掲げる。

○亡くなった夫がオラシヨを唱えていた。(五島中通島出身の移住者)

○小さい頃に頭に水をかけられた記憶があり、カトリック信者ではないのに「トマどん」というあだ名があった。自分はカクレキリシタンであった。しかし、こちらに教会ができてからはカクレキリシタンはしなくなつた。五島から来た人はカクレキリシタンだった。N家、O家、M家、N家などがそうだ。しかし、一世はいなくなつた。(五島日島出身の移住者)

○父親はカクレのお祈りをしていた。カクレの洗礼名を持っていた。(五島奈留島の移住者)

戦前、戦後を通じて、長崎からは多くの人々が海外に移民として渡っていった。サンファン移住地での事例が物語るとおり、彼らの中には相当数のカクレキリシタンがいたと考えられる。彼らが移住先でどのような信仰生活を送っていたのかについては詳らかでない。今後追究すべき課題である。

三 結論

以上、記述が多岐にわたつたが、本章では、これまで指摘・言及されてこなかったことについて整理し、まとめたい。

まず、本稿で主題として取り上げた戦後のキリシタン家族のボリビア移住は、江戸時代から連続と続けられてきたキリシタン移住史の延長線上に位置づけられると考えられる。

次に、専ら経済的貧窮や広い土地・海外への憧れなどによって説明されがちであった移住の動機について、信仰上の理由があったことが明らかになった。サンファン移住地の長崎出身のクリシタン家族は、自分たちが、殉教者を含む潜伏クリシタンの子孫であることを強く意識しており、自由にカトリック信仰ができる安住の地を求めて渡ってきた。「旧信者」「新信者」という言葉が繁用・頻用されるのも、彼らが熱心な信仰心を持っていたことにその理由を求めることができそうである。

最後に、サンファン移住地にカクレクリシタン家族が移住していたことも、管見の及ぶ限り、本稿の著者の調査によって初めて明らかになったことである。

注

(ウェブ・ページの最終アクセスはすべて二〇一三年(平成二五年)三月二日)

- (1) サンファン日本ポリビア協会編「サンファン日本人移住地」(パンフレット)、サンファン日本ポリビア協会、二〇一〇。
- (2) 日本人修道女の常駐が始まった年号について、国本伊代「ポリビアの「日本人村」」(中央大学出版部、一九八九、二二六頁)は一九六五年(昭和四〇年)、『三〇年史』と『五〇年史』は一九六八年(昭和四三年)とする。
- (3) 丸山孝一「カトリック土着クリシタンの末裔たち」日本放送出版協会、一九八〇、二六一―三〇頁。
- (4) 神戸大学経済経営研究所編「黒島―出稼ぎと移住の島―」(中南米研究叢書Ⅳ) 神戸大学経済経営研究所、一九六一、一四一―一五頁。
- (5) 伊東誠二監「萌芽福岡教区五〇年の歩み」カトリック福岡教区、一九七八、二三一―二四頁。
- (6) 神戸大学経済経営研究所編、前掲書、一五頁。

- (7) 片岡弥吉「ある明治の福祉像 ド・ロ神父の生涯」日本放送出版協会、一九七七、二〇三―二〇六頁、長崎県のホームページ(田平教会紹介ページ) <<http://www.pref.nagasaki.jp/okyo/nagasakinokyokai-web/kyokai/fabira.html>>。
- (8) カトリック福岡教区のホームページ(能古島教会紹介ページ) <<http://fukuoka.catholic.jp/nokonosinach.html>>。
- (9) 丸山孝一、前掲書、二二五頁。
- (10) 神戸大学経済経営研究所編、前掲書、九六一―一〇〇頁。
- (11) 佐藤早苗「奇跡の村―隠れクリシタンの里・今村」河出書房新社、二〇〇二、四四―四六頁など。
- (12) 神戸大学経済経営研究所編、前掲書、一五四頁。
- (13) Thompson, Stephen Ide, 'Religious Conversion and Religious Zeal in an Overseas Enclave: The Case of the Japanese in Bolivia' *Anthropological Quarterly*, vol.41, No.4, Washington, D.C., 1968.
- (14) マリスト・ブラザーズのホームページ(畑中光明氏紹介ページ) <<http://www.champagnat.org/400.php?a=6&n=2359>>。
- (15) 松村菅和・女子カルメル修道会共訳「バリ外国宣教会年次報告―聖母の騎士社―」一九九六、三〇頁。
- (16) 一二五周年記念誌編集委員会編「信仰の道程 今村信徒発見 一二五周年記念誌」今村カトリック教会、一九九二、一九六頁。
- (17) 一二五周年記念誌編集委員会編、前掲書、二〇〇頁。
- (18) 宮崎賢太郎「日本ではなぜクリスト教徒数は増えないのか」(「クリスト教史学会 第六三回大会 研究発表要旨集」クリスト教史学会、二〇一二、九頁)には、長崎地方における「旧信者」「新信者」の使用実態、使用意識が紹介されている。
- (19) 国本伊代、前掲書。
- (20) 『十五年史』、一六二頁。
- (21) 『三〇年史』、二一五頁。
- (22) 『五〇年史』、三九一頁。
- (23) 若槻泰雄「移民原始林に挑む日本人」弘文堂、一九六六、一三三―一三四頁。
- (24) 『三〇年史』、二一五頁。
- (25) 『五〇年史』、三九二頁。

(26) 日本カトリック海外宣教師を支援する会のホームページには、当地で活動した修道女の書簡が公開されており、具体的な活動内容を知ることができる。

〔付記〕 本稿は科学研究費補助金若手研究（B）（課題番号二三七二〇二三四）「消滅の危機に瀕する「渡来語」の緊急調査」（研究代表者：小川俊輔）による成果の一部である。

（県立広島大学）

[2]

Nagasaki to San Juan, who sought the freedom to exercise their Catholic faith.

3. Foreign missionaries who could speak Japanese and Japanese nuns were sent from Japan for the believers living in San Juan. A brick church was built in 1961, and Manuel Fernández, who belonged to the Society of Jesus, became the first priest of the San Juan Catholic Church. He was called “Father Taro” and was beloved by the believers. The feelings of respect and gratitude toward him by the believers are strong even today. Furthermore, the devoted activities of the father and the nuns were appreciated and respected even by the non-believers.

4. In 1873, the Japanese Government abolished a ban on the Christian faith, and about half of the Hidden Christians in Nagasaki came back to the Catholic Church and were baptized by priests, but the other half continued their faith in secrecy. The descendants of the people from the latter group had immigrated to San Juan, but they did not attend Catholic mass, and instead chanted prayers called “Orasho” which were handed down from their ancestors.

(Prefectural University of Hiroshima)

Christian Families who Emigrated from Nagasaki to South America:

A case study on “Colonia San Juan” of the Plurinational State of Bolivia

Shunsuke Ogawa

Many Japanese emigrated overseas after the second half of the 19th century. Hawaii, Brazil, Canada, and the United States are widely known as countries where many Japanese immigrated. On the other hand, the emigration beginning in 1954 to Bolivia in South America is not well known. Nowadays, there are two large Japanese settlements named “Colonia Okinawa” and “Colonia San Juan” in this country. All immigrants in “Colonia Okinawa” came from Okinawa prefecture in Japan. However, the people who immigrated to “Colonia San Juan” came from all over Japan except Okinawa, and about half of them were people from Nagasaki Prefecture. The proportion of Japanese migrants in this settlement in October 2010 was as follows: 46.4% were from Nagasaki, 7.4% were from Fukuoka, 5.1% were from Hokkaido, and there were also many Catholic believers who emigrated from Nagasaki. They are the descendants of the people who converted to Catholicism in the 16th century and defended the Christian faith as Hidden Christians <KAKURE-KIRISITAN> in an era when the Christian faith had been banned by the government from the 17th to 19th centuries.

The author visited this settlement from February 14 to 29 of 2012, and conducted interviews with the Christians who emigrated from Nagasaki. As a result of these interviews and some previous works regarding this settlement, the author revealed the following four points as conclusions:

1. Since the end of the 18th century, Christians in Nagasaki have emigrated from the Kyushu region of Japan repeatedly to look for a new and better life. It seems that one reason why many Catholics had immigrated to San Juan from Nagasaki is that their ancestors who had a history of repeated migration.

2. We tend to think that migration to foreign countries is caused by economic reasons, but there were religious reasons for the people who emigrated from